

令和4年度

奈良県公立学校優秀教職員表彰 実践事例集

【分野番号】

- ① 学習指導の部（学習指導における顕著な成果）
- ② 生徒指導の部（生徒指導、進路指導等における顕著な成果）
- ③ 学校体育の部（学校体育や学校保健、学校給食における顕著な成果）
- ④ 特別活動の部（特別活動等の指導による児童生徒の育成における顕著な成果）
- ⑤ 特別支援教育の部（特別支援教育における顕著な成果）
- ⑥ 地域との連携・協働の部（地域との連携・協働の推進における顕著な成果）
- ⑦ 国際交流の部（ユネスコ活動や国際交流等の分野における顕著な成果）
- ⑧ 学校事務の部（学校事務の機能強化や勤務環境の改善等における顕著な成果）
- ⑨ 学校教育の部（学校教育において、他の教職員の模範となるような成果）

令和4年12月

奈良県教育委員会

目 次

【小学校】

学校教育の部 (⑨)

- 1 教師が学び、考え続ける大切さ ～一人一人の不安を軽減するために～
天理市立前栽小学校 教諭 歌房 芙美子 1

学習指導の部 (①)

- 2 子ども自身が学習レリバンスを見出すための実践の開発とその成果について
～リンクワークプロジェクトの実践を通して～ I C Tを活用した教育活動
生駒市立あすか野小学校 教諭 大森 康貴 3

学習指導の部 (①)

- 3 子どもが主体的につながる音楽活動について
橿原市立金橋小学校 教諭 中尾 恭子 5

学校体育の部 (③)

- 4 運動好きな児童の育成のためのつながりを大切にした学校体育の取組
香芝市立三和小学校 教諭 高井 海彦 7

【中学校】

学習指導の部 (①)

- 5 学習指導等における特に顕著な成果について
上牧町立上牧第二中学校 教諭 梅津 雅亮 9

【県立学校】

学校教育の部 (⑨)

- 6 観点別学習状況の評価の実践について
奈良県立国際高等学校 教諭 本間 直樹 11

地域との連携・協働の部 (⑥)

- 7 教育企画部の取組
－高取町・明日香村（飛鳥地域）との協働学習／高大連携について
奈良県立高取国際高等学校 教諭 下井 哲也 13

地域との連携・協働の部 (⑥)

- 8 高等部 作業学習「農場班」での実践
奈良県立奈良西養護学校 教諭 佐竹 寛之 15

地域との連携・協働の部 (⑥)

- 9 win-win の関係で学び合う地域支援『実践ヒント交流会』
奈良県立大淀養護学校 支援教育部「実践ヒント交流会」 17

若手教職員等奨励賞

【県立学校】

学習指導の部 (①)

- 10 表現探究による学習の基盤となる資質・能力を兼ね備えた創造性豊かな人材の育成
奈良県立香芝高等学校 教諭 川下 優一 19

1 実践内容

毎年、学級には特別支援学級に在籍している児童、入級していなくても通級している児童や配慮の必要性が顕著な児童、不登校(傾向)児童、虐待傾向にある児童がいる。問題なく登校しているように見える児童でも、各々多かれ少なかれ困っていることがある。それは学習面であったり人間関係であったりするが、そうした“困り感”は“不安感”につながると考える。みんなが不安感をあまり感じることなく、のびのびと力を伸ばしていけるよう実践していることを報告する。

(1) 教師が様々な“ものさし”をもつ

10年前、虐待を受けた児童を担当し、“愛着障害”について積極的に学んだ。一人の児童のために始めた学習であったが、他の児童や他の発達障害とどんどん繋がっていき、特別支援教育の位置付けの重要性を感じるようになった。毎月1回は専門の先生から講義を受けることを続ける中で、自分の“ものさし”の変化を実感できるようになった。

例えば“板書を写さない”という行動に対して、「写しなさい。」と指示するよりも、「どうして写さないのだろう。」と考え、幾つかの可能性が思い浮かぶようになった。「板書の文字がはっきり見えているのか。視力が悪いせいで見えづらいのではないか。見えてはいても見え方に問題があり、正しく見えていないのではないか。」その点に問題がないのであれば、「アウトプットに問題があるかもしれない。」例えば、「視線の移動が難しく、集中が続かないのではないか。マス目が小さくて字が書きにくいのかもしれない。ただ単に、気持ちの問題ということも考えられる。そもそも“字を書く”という行為に苦手意識があるのか。文章量が少なければ写すことができるのか。」

「写させないと」という教師である自分中心の“ものさし”ではなく、その子中心に考え、見立てる。そして、“席の場所を変える” “板書を写すところを限定する” “板書と同じことが書かれたノートを渡し、それを写すようにする” “() 抜きにしたノートを渡し、重要な用語だけ写させる” などの手立てを考え、どの手立てならば課題に取り組みやすくなるのかを探っていくようにする。

学習活動に参加しにくい児童は学級に何人もいる。その子らの困り感を減らせるようにまた他の様々な児童の立場でも考えるようになったことで、指導事項の優先順位が確立されたり、より学級全体にも使えるシステムができたりしている。5年生を担当している今年度で言えば、算数の学習が例に挙げられる。定着度に差があり、課題に取り組む時間に大きな差が出た。そこで内容によって“ここは自力でする”という目標を示し、その部分以外は電卓や九九表などのお助けグッズや友達からのヒントを利用しても良いようにした。また、教科書やドリルの問題を解く際には、問題数を自分で選び、与えられた時間の中で自分が選んだ問題数を解くというシステムにした。得意な子は時間内に全問ミスなく解くという目標が自然にでき、苦手な子は数問でも自分の力で集中

して取り組むという目標になる。学級全体で“自分に合ったやり方で、決めた課題に一生懸命取り組む”という姿勢にすることで、苦手な子も周りを気にすることなく取り組めるようになっていく。特定の子に手立てを打つのではなくクラス全体で行うことで、苦手な子が“私だけ…”と否定的に感じることを軽減でき、不安感の軽減につながっているのではないかと考えている。

児童一人一人の様々な“ものさし”を知ることは、同時に教師である自分の本来の“ものさし”に気づくことにもなった。自分の捉え方や考え方、気になることにも傾向があることに気づいたのだ。そこに気づけなかったり忘れてしまったりしては、“自分本位なものさし”で児童をみてしまうかもしれない。常に新しい情報を取り入れたり、基本事項を確認したりするために、研修会や講演会などで学ぶ姿勢を持ち続けることを大切にしている。

(2) 「登校するのは当たり前ではない」

数年前に担当したA児はASD(自閉スペクトラム症)と診断されていた。本人の不安感の強さと体調によって、毎日の登校は大変難しかった。交流学級にいる時は、支援は必要だが、みんなと同じように活動をするので、最初は母親の訴えと私の捉えに温度差があった。A児と共に過ごしながらか、支援について考え各方面に相談も重ねた結果、完璧主義者なA児は、友達の前では“できない自分”を見せないように、そして“友達が求めているであろう自分”を考え、空気を読むことに全精力を注いでいるのだと分かった。A児はHSC(ハイリー・センシティブ・チャイルド)でもあったのだと思う。集団の中にいるだけで消耗していた。そんなA児と2年間を共にし、「登校するのが当たり前」という感覚が消え去った。

「登校するのが当たり前」と思うことで、見えなくなってしまう“子どもの頑張り”や“不安”があると思う。逆に、「登校するのは当たり前ではない」と思うことで、児童が学校で過ごす時間をより充実したものにしたという考えを強くもつようになった。

2 成果及び課題

「この子は配慮が必要です。」と引継ぎで言われていた児童が、学習に参加したり、以前はやりたがらなかった課題に前向きに取り組むようになっていたりしている。試行錯誤しながら児童に関わり、研修を積み重ね、自分自身の子どもの見方の変容が“配慮が必要”と言われていた子が力を発揮できるような手立てができていることにつながっていると考える。

特に専門の先生に講義や事例検討をしていただけて得たものは大きい。現在は同学年など限られた職員への情報提供で終わってしまっているため、今後は、より多くの職員と情報交流をしたり、研修の紹介をしたりするなどして、職員の指導力向上のために働きかけていきたいと考えている。

今回報告した実践内容は、特別なことではないと思うが、この実践を続けていくことに意味があると思う。これからもこの基本の実践を大切にしていきたい。

小学校 学習指導の部 (①)

子ども自身が学習レリバンスを見出すための実践の開発とその成果 ～リンクワークプロジェクトの実践を通して～

生駒市立あすか野小学校 教諭 大森 康貴

1 実践内容

「子どもが学習にどのような意味や意義を感じているか」ということは「学習レリバンス(relevance)」と表現され、学習意欲に影響するといわれている。この学習レリバンスを高め、子どもの学習意欲を全体的且つ持続的に向上させることを目的として、1年間にわたる継続的プログラム(以下、リンクワークプロジェクト)を本校5年生(令和3年度)に行った。

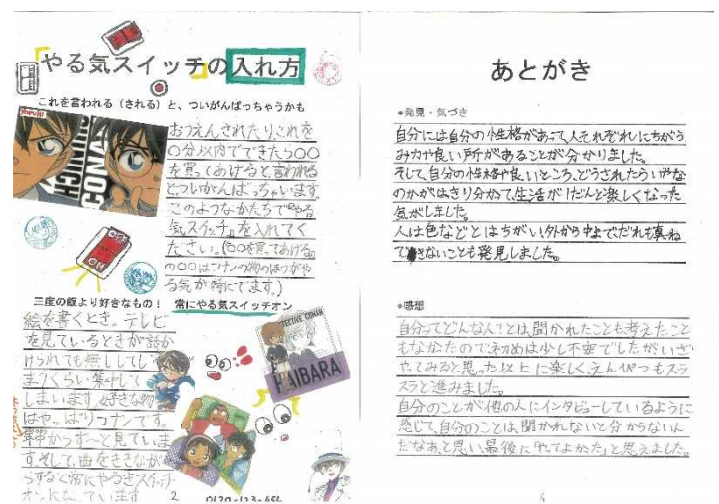
本実践は、生駒市教育委員会教育指導課の日高興人氏、尾崎えり子氏らの協力を得て、協議しながら行った。本実践は、三つの大単元で構成した。

(1)「自分の取扱説明書をつくろう」 1学期：—自分(今)を知る—

1学期は「自分の取扱説明書をつくろう」という学習を行った。自分の長所や強み、自分の感情のコントロール方法、そしてそれらをありのままの自分として受容することの大切さ等について学習した(下図参照)。

「自分は工夫ができると気付いて、自信がついた。」「自分の性格や良いところ等が分かり、生活が一段と楽しくなった気がする。」とあるように、自己肯定感や生活満足感の向上につながっている様子が見られた。

また「自分ってどんな人?と聞かれたことも考えたこともなかったが、やってみると思った以上に楽しかった。」とあるように、子どもが成長の過程で自己理解を深める経験は実は少なく、このような機会があることで、子どもは楽しんで自己理解を深めることができると分かった。



(2)「ゲストティーチャーから生き方を学ぼう」「いろいろな職業のことを知ろう」

2学期：—将来を知る—

2学期は「ゲストティーチャーから生き方を学ぼう」と「いろいろな職業のことを知ろう」という2つの学習を行った。

前者の学習では、多様な働き方で活躍されている5名のゲストティーチャーにオンラインで講演をしていただいた。特に、学校での学びが社会に出てどのように役立つか、自分らしく生きるために大切なことは何か等に焦点を当てて、学ぶことの大切さについて話をしていただいた。

後者の学習では、「Edutown あしたね」というキャリア教育・職業調べサイトを利用して、自分の興味関心とつながる職業の仕事の内容や魅力は何か等について、調べたこ

とをまとめた。

(3)「学校の学習と将来とをつなげよう」 3学期：—今と将来をつなぐ—

3学期は、「学校の学習と将来とをつなげよう」という学習を行った。この単元が、リンクワークプロジェクトにおいて学習レリバンスを見出す力を育成する中心的部分にあたるものである。

第一次では、「サバイバル・災害・学校・生活・自分自身」の5つのテーマ別に、「無人島で火を起こすには?」「災害時に避難所を探すには?」等の25のミッションリストを用意した。そして、学校の学習内容を使ってミッションを解決する方法を考えさせた。この学習活動を通して、学校の学習内容とその使い方とを関連付ける思考力を養った。

第二次では、自分の将来像と学校の学習内容とを関連付けて考えを広げ、それをマインドマップに整理した。下図が子どもの作品例である。

自分の将来像を幹にしてそれと関連する学校の学習内容を枝でつなげ、外側にいくほど具体的な内容になるように構造化して描いていることが分かる。

内容を見ると、例えば「頼られる人」になるために、国語の「文章構成力・聞く力」を身につければ、「人に相談される自分」につながると関連付けていることが分かる。



2 成果及び課題

まず成果としては、アンケート調査の結果、全学習活動にわたり90%以上が「楽しかった」と回答し、97%以上が「学習が役に立つ」と回答した。

また、子どもの感想には「学校の勉強を何のためにするか考えたことがなかったが、授業の重要性の見方が変わった。」「勉強のやる気が出た。」「夢や未来は今の学習とつながっている。全てのことに意味があると思えた。」等の記述が散見された。これらは、子ども自身が学習レリバンスを見出すことのできる力が高まったことを示す一つの資料であると思われる。

加えて「自分にはこんないいところがあるのだと初めて知った。」「初めて勉強する意味を考えた。」という趣旨の記述も多かったことも踏まえると、本実践のような自己理解を深める場や学習の意義を考える場を設けることで、学習レリバンスを見出すことができる子どもを育成することは十分可能であろう。

一方で、学習レリバンスが真に高まったかどうか、すなわち、より客観的に学習レリバンスの変容を測定する研究方法の改善が今後の課題である。そしてより系統的に学習レリバンスを高めていく実践開発を行っていきたい。

小学校 学習指導の部 (①)

子どもが主体的につながる音楽活動について

檀原市立金橋小学校 教諭 中尾 恭子

1 実践内容

マスクでお互いの表情が見えない中、様々な行事が精選され、子ども達の心の距離までも生じてしまう毎が続いた。今だからこそ音楽の力で子ども達の心を耕し、学校生活全体に彩りを添えたいと思う。音楽科においては感染対策に伴い、学習制限が課された時期もあった。困難に直面しつつも、子どもたちにどんな学びが必要かを考え、以前の音楽活動よりも子ども同士の「つながり」を意識した活動を意図的に取り入れてきた。

(1) 授業実践

コロナ禍以前の2018年、2019年に県や市小学校音楽研究会で模擬授業・研究授業を行った「グループ学習を効果的に取り入れた歌唱活動の展開」では、子どもたちがより主体的に活動を行えるよう、人数を一定にしないグループ活動（2人～8人）を試みた。可能な状況になれば引き続き検証したいと考えている。

そのためにも個々の技能を高めておく必要があり、常時活動では音楽科の基礎基本である声づくりやリズム打ちの力を定着させるよう務めている。個別最適な学びと協働的な学びの一体化を考え、「クラス→少人数→個人」への移行、またはその逆方向をスムーズに行えるよう「一人チャレンジコーナー」を設定し、時にはクラス対抗の要素を取り入れて意欲の持続を図った。言葉によるコミュニケーションを重視し、拡大楽譜に付せんを貼り、自分たちの気づきを可視化して伝えることも活動内容に取り入れている。またchromebook普及に伴い、ロイロノート（シンキングツール）を使っでの意見交流が容易になった。教材によって意見や考え方の共有・整理に利用するよう心掛けている。

(2) 音楽交流会 & 全校リモート音楽会

昨年度はコロナ禍でも成立する音楽会を模索した。2学年ずつ対面でミニ音楽交流会を行い、後日その様子を全校児童が視聴する形を取った。人数の多い学年はボディパーカッションや打楽器中心の合奏を行い、感染対策を講じた上で行った。

今年度は習得機会が減り、技能低下が著しい表現領域の器楽（リコーダー）を中心に合奏を編成し、十分な距離を取った上で実施した。

練習時、chromebook等で動画を撮り、自分たちの演奏を客観的に確かめさせると、「思っていた自分と違う！」と違和感を出し合い、理想の歌声や音色に向けて修正する姿が見られるようになった。



【ボディパーカッションのグループ練習風景】

(3) 学年間のつながりを深める掲示コーナー

音楽室の後方壁面に掲示コーナーを作り、学年別に学習活動を他学年に伝えられるよう工夫した。学習活動を客観的に思い出し、言語化することで、子ども同士の対話や学習の深まりが生まれた。具体的な内容例としては【校歌のひみつを探ろう・リコーダーをふくコツBEST5・ボディパーカッションQ&A・新一年生



【音楽室後方の掲示コーナー】

へおてがみ、ピアノの先ばいより】など異学年交流が減る中でも、学年間のつながりが生まれるような掲示コーナーを心掛けている。

(4) 職員間のつながりを大切に

副教務として主に校務支援システムの伝達や職員研修を行った。新指導要領施行時に学校内の評価規準をまとめる役割を任される中で、自分自身の視野を広げ、横断的に教科を考える機会が得られた。さらに教育相談部のリーダーとして不登校傾向児童のケース会議に携わる中で、自分自身が校内で職員同士とつながりを密にし、連携していくことの大切さを実感した。

3 成果及び課題

校内音楽会の後、「6年生かっこよかった！」と一生懸命にボディパーカッションを真似る1年生。初練習では恥ずかしくて並べなかった児童が「来年は何する？」とうれしそうに声をかけてくる。音楽を通してつながりを深めることが自信となり、学年を超えて次への意欲にもつながることになった。今だからこそ音楽活動を通して得られるなかま集団での一体感や、音楽自体がもつ豊かな感性を育む力が果たす役割は大きい。今後も子どもたちが見通しをもち、学びをふり返りながら自分のこととして学ぶ「主体性」と、他者との関わり合いを通じて学ぶ「つながり(協働性)」を具現化していく授業づくりを行っていききたい。そして子ども達の素直な感性が発揮できる場づくりを継続し、今後も子ども達の心に深く残る音楽の時間になるよう邁進したい。

4 その他参考となる事項

音楽之友社：「教育音楽」2022年5月号掲載、2020年10月号掲載

小学館：「五年生いきいき学級経営（教育技術MOOK）」

～子どもたちをつなぐクラスの音楽～

「新しい評価観と通知表記入文例 6年（教育技術増刊）」

小学校 学校体育の部 (③)

運動好きな児童の育成のためのつながりを大切にした学校体育の取組

香芝市立三和小学校 教諭 高井 海彦

1 実践内容

近年の本県の体力テストの結果を見ると全国平均レベルを維持するものの、令和元年度、3年度と下降傾向になっており、本校も全国や奈良県と同様の傾向が見られる。その中で、児童が主体的に運動に取り組み、運動好きな児童を増やし、体力の向上を目指すために学校内及び奈良県小学校体育研究会で、児童が運動に触れ、楽しさを味わうことのできる取組を推進してきた。

これまで17年間、奈良県小学校体育研究会に所属し、平成29年度以降は理事長として、本県の児童が豊かに運動とつながり運動が好きと言える児童を育成するために、指導法研修会や研究大会、記録会の開催を主導してきた。その中で学んだことを自校にもち帰り、次の3つの点を中心に学校での取組を進めてきた。

(1) 体育科授業研究の推進

本校の研究テーマ「豊かな心とたくましい体を育み、仲間とつながる体育学習」の実現に向けて、児童が豊かに運動とつながり、仲間とつながることを通して運動好きな児童を育成するための体育学習の実践を推進してきた。その中で、単元の学習展開の工夫や教材教具、児童同士がつながることのできるルールや運動の場の工夫を大切にして研究を進めてきた。学級担任時には、苦手な児童も安心してゲームに臨めるコートや教具の工夫をしたりみんなが得点することでチームが有利になる特別ルールを作ったりして、友達とつながることを大切にしたゴール型ハンドボールのゲームの授業を研究大会にて公開した。その後、特別支援学級担任時には、通常学級の体育では十分に活躍できない児童も、活躍できるような特別支援学級の児童に合わせた場や互いのよい所を見付け合える授業展開の工夫した「なかよし体育」に取り組んだ。さらに現在は教務主任として、授業づくり研修会を行ったり、各学年の授業計画に関わったりして、児童が運動に親しみ仲間とつながることを通して、もっと運動に取り組みたいと思えるような体育科の授業づくりを推進してきた。



(2) 業前体育「さわやかタイム」の推進

児童が体を動かす楽しさに触れ、運動に親しむ場を創造するために業前体育「さわやかタイム」を計画し、中心となって推進してきた。1学期には、体を動かして遊ぶことを通して児童が運動に親しみ、体力の向上を目指す「さわやか外遊び」を行ってきた。体力テストの動きにつながるような運動も取り入れ、様々な動きを経験できるような場を設定して行ってきた。2学期には、全身持久力の向上を目指した持久走「さわやかかけ足」を行った。児童それぞれが目標をもって走れるように声をかけたり、自分のがんばりが目に見えるようかけ足カードを活用したりした。3学期には巧緻性と俊敏性、

持久的な動きを目指した短縄跳びやグループ縄跳びを行う「さわやか縄跳び」を行った。毎年できることを増やしていくことを目的として、全校で共通の縄跳びカードを作成して取組を進めた。また、その縄跳びカードの技紹介ビデオを運動委員会の児童と共に作成し、全校児童がいろいろな縄跳びの技にチャレンジできるようにしてきた。この業前体育「さわやかタイム」の取組を行うことで、児童が年間通して運動に親しむ機会をもてるようになってきた。



(3) 記録会への積極的な参加の推進

香芝市や奈良県で開催されている水泳や陸上、縄跳びの記録会へ、本校児童の積極的な参加を推進してきた。「香芝市小学生水泳記録会」「奈良県学童水泳記録会」「奈良県小学生陸上競技記録会」「みんなでチャレンジ」の各種記録会へ参加できるように、練習機会を作ったり、がんばっている児童を全校に紹介したり、学校の引率や指導の体制を整え、より多くの児童が参加できるようにしてきた。これまでに、各記録会にたくさんの児童が参加し、体を動かす楽しさを味わい、運動に親しむ児童を育成してきた。

2 結果及び課題

これまでの、児童が運動とつながり仲間とつながることを大切にした授業づくりや、体を動かす楽しさに触れ、運動に親しむことを目指した業前体育の取組の中で、児童に多くの運動に触れる機会を作ることができ、楽しく運動する経験を積ませることができた。その取組の中で児童が積極的に運動に取り組む姿が多く見られた。その中には、普段運動を苦手と感じている児童も主体的に参加する姿が見られた。また、校内授業研究を推進する中で、毎年多くの授業研究を行い、様々な領域の授業に取り組むことができた。その中で指導法を深め合ったり学習環境を整えたりすることができた。

しかし、これらの取組を進めてきたものの、本校の体力テストの結果では、県平均を下回る種目も半数ほどあり、体力が十分に高まっているとは言えない。また、体育科の学習指導においても、系統立てた指導を推進するという点において、まだ不十分であり、これらの取組をより多くの教員と知見を共有する必要があると感じている。今後は、小学校6年間でしっかりと児童に力を付けることのできる年間指導計画や学習展開について整備、研究を進めていきたい。

そして、これらの取組をさらに大きく広げ、児童が豊かに運動とつながり、仲間とつながることとなり、生涯にわたって運動に親しむ児童を育成していけるようにしていきたい。

中学校 学習指導の部 (①)

0JTで進める、学力を高める指導・支援の工夫について

上牧町立上牧第二中学校 教諭 梅津 雅亮

1 実践内容

昨年度は、新学習指導要領が全面実施された。また、生徒一人に一台「Chromebook」が貸与された年でもある。昨年度より務める教務主任として、学校全体に様々な提案をして、評価・評定の見直し、主体的な学習を進めるための「家庭学習の手引き」の改訂、ICTを積極的に用いて生徒の主体性を育てる授業の創造等に取り組んだ。さらに、今年度からは進路指導主事を兼務することになり、生徒が学習の大切さを理解し、目的意識をもって学習に取り組み、キャリア理解を基に自ら進路を切り拓くために、進路学習会や進路講演会などの開催、進路便りの充実に重点を置いた。また、保護者にも進路保護者会や進路便りを通して、こうした視点への理解と協力を促している。

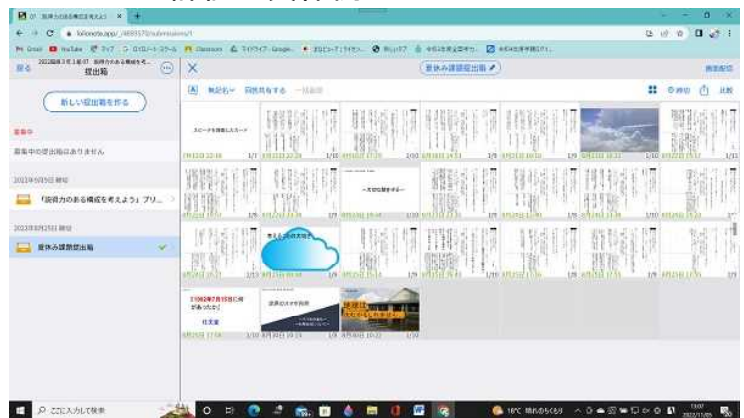
「教育は人なり」と言われるように、教員個々の力量及び学校力の強化が、生徒の学力向上には欠かせない。そこで、研修に励み、自らの取組内容を教員全体に伝え、授業力向上に向けて、共に切磋琢磨する教員集団を目指した。

(1) 学校全体の指導力向上やICT活用に向けて行った0JTについて

「主体的に学習に取り組む態度の評価」について、「具体的な評価場面や評価項目、評価基準の設定などがわかりにくく、評価の規準が難しい」という声が多くあった。そこで、職員研修や職員会議などを通じて、まずは評価材料を蓄積していくこと、また「主体的な学び」の根本には、「知識・技能」の定着や活用が伴うことなども、国語科での評価の具体例を提示して説明を重ねてきた。さらに、生徒の学力向上と教員全体の授業力を高めるために、率先垂範して自身の授業改善から取り組み、先生方へ伝えることが、何よりも大切であると考えた。特に、「Chromebook」を活用するという点に重点を置き、「ロイロノート」やGoogleの「スプレッドシート」「フォーム」「meet」などを積極的に活用し、生徒が授業の中で、これらのツールを使って学習する場面を毎時間取り入れている。

(2) 「主体的に学習に取り組む態度」についての評価の具体例について

右の写真は、国語科3年生で行った「説得力のある構成を考えよう」という単元で、「ロイロノート」を使い授業を展開した例の一部である。（「社会で起きている出来事や問題の中で、自分の心が揺さぶられ、多くの人に伝えたいと思ったこと」をスピーチで伝えるという内容である。）



スピーチをするにあたり、「Googleドキュメント」でスピーチ原稿を、また、「Googleスライド」でプレゼンテーション用資料を作成させ、それらを「ロイロノート」に集約し提出させた。スピーチは、ロイロノートで録画させて提出させ、お互いの内容を共有

1 実践内容

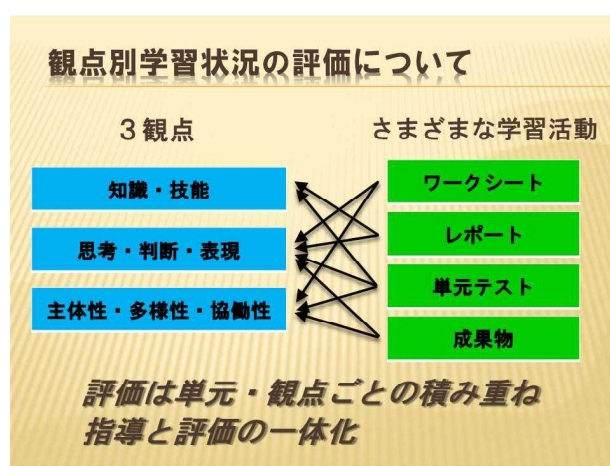
本校は、令和2年度に開校し、開校当初から生徒の深い学びに向けて、全職員で観点別学習状況の評価に取り組んでいる。観点別学習状況の評価の導入から実践にあたって、周りの先生方に助けていただきながら、教務主任として取り組んだことについて報告する。

(1) 観点別学習状況の評価の導入にあたって

本校での導入にあたり、県内でも「主体性・思考力」を問うような授業・評価を実践している高等学校も増えてはいたが、まだまだ「評価＝テスト」の考えが根強く残っており、新課程で理想とされている探究型授業や評価のあり方との差異は大きく、指導と評価両面での改善が必要であると感じていた。そこで、まずは校内研修を行い、全職員で指導・評価のあり方について共通理解を図る場を設けた。その際、全ての先生方が新しい評価を身近なものと感じられるように、「取り組みやすさ」を最優先し、学期に複数回、定期的に校内研修を行うようにした。

(2) 新しい評価の確立に向けて

校内研修を行うにあたり、令和2年度に教務部内にプロジェクトチームを結成し、3観点（「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体性・多様性・協働性」）について、単元ごとに評価を積み重ねることができるよう何度も検討を行った。また、プロジェクトチームで「観点別の評価計画例」を作成し、各教科内で生徒の深い学びのために、何に「重みづけ」をして授業・評価を進めていくのか検討していただいた。そのこと



によって、評価を行う指導者側の意識が改善し、生徒を伸ばすためには何が必要か、育てたい資質・能力は何か、という新しい評価に必要な視点を校内で共有することができた。

令和3年度には、教育課程研究集会で本校の実践内容を発表する機会を頂き、多くの助言をもらいながら、そこで得られた知見を校内で共有し、より良い実践につなげることができた。

(3) 主体的・対話的で深い学びに向けて

本校では、重点目標の一つとして「主体的・対話的で深い学び」を掲げ、生徒の「自らの学習を調整しようとする態度」の育成を目指している。その実現に向けて、学期に1、2回の定期考査だけではなく、内容のまとまりごとの確認テストや成果物等により、生徒に学習目標の達成度を観点別にフィードバックすることで、指導と学習のPDCAサイクルの確立に開校当初から取り組んできた。

(4) 指導と評価の一体化に向けて

令和3年度には、一部の定期考査を廃止し、確認テストや成果物等での評価を行うことにより、学期途中での生徒の学習の改善につなげることができた。令和4年度からは、全学年・全学期で、定期考査ではなく単元テスト等を用いた新しい評価を導入している。定期考査の廃止により、従来の集中学習ではなく「日々継続して学習する習慣」の育成を目指し、また、評価の機会や方法を増やすことで、より妥当性・信頼性のある観点別学習状況の評価を構築することができた。そして、その評価の結果を受けて、教師は自らの指導を改善し、生徒は自らの課題や理解の状況を振り返り、自らの学習を調整して新たな課題を設定する、という一連の活動を繰り返しながら、指導・学習両面での質の向上に取り組んでいる。

(5) 新しい時代に求められる学校教育を目指して

令和4年度から、各学期に2回、従来定期考査を実施していた期間を利用し、生徒が主体的に探究学習に取り組む期間「個人探究週間」を設定した。校内での探究的な学習や、校外での探究活動等に取り組み、これまでのような暗記学習ではなく、生徒自身が課題に対する問を立て、その問に対する答えを自らが導き出すような学習に取り組むことで、これからの新しい時代を生き抜くために必要となる「生きる力」の育成を目指している。



個人探究週間中の国語の授業 ～歌舞伎から学ぶ～

2 成果及び課題

周りの先生方に助けていただきながら、観点別学習状況の評価に取り組んできた結果、新しい評価が教師や生徒にとってより身近なものとなった。令和4年度の学校評価アンケートでは、「定期考査だけでなく様々な面から成長を評価してくれている」という項目に対して、保護者、生徒ともに85%を超える肯定的な意見を頂いた。これは、これまで本校が取り組んできた指導と評価両面での改善が進んだ結果であると考えられる。また、指導と評価の一体化を意識しながら、教務部が中心となり先生方をサポートする体制を構築したことは、教員の働き方改革にもつながった。

新課程で理想とされている評価の実施に向けて、本校でもまだまだ改善途中であり、特に「主体性」の評価については課題が残り、生徒の変容をみとめるための施策をさらに検討していく必要がある。今後も校内研修を進めるなど、指導と評価両面での改善に取り組んでいきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立国際高等学校HP

1 実践内容

本校は、高取高校として開校した時から今日まで、飛鳥地域（高取町・明日香村）とともに歩み、地域に愛されながら成長してきた。本校発展の背景には、大きく飛鳥地域が関係している。

令和3年2月に高取町・明日香村と連携協定を結んだことを受け、これまで以上に地域との協働学習や相互支援を促進していくため、および、ICT教育の推進を目指して「教育企画部」が令和3年度から設立された。教育企画部長として、各分掌・教科等と連携・協力しながら、取り組んできた内容を報告する。特に、地域連携・協働学習と高大連携に絞った内容となるが、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）で議論された内容も踏まえた実践内容である。

（1）高取町立たかむち小学校との英語交流活動

たかむち小学校からの協力依頼が端緒となって実現した活動である。令和3年度は1回実施し、令和4年度からは学期に1回、年間3回の実施となる。国際英語科2年生が小学生にやさしく英語を教えることを通して、教える難しさや伝える大変さ等を身をもって体験できる貴重な学習の場となっている。小学生にとっても、英語を楽しく学習するためのきっかけになり、英語を使った活動で楽しく英語を学習することができたと感じている。



（2）国際理解学習・海外派遣プログラムの拡充を目指した国際交流サマーキャンプ

コロナ禍のために海外派遣プログラムが中止となったことを受け、その代替学習プログラムとして令和3年8月に生まれた取組である。本校生徒だけではなく、地元の高取中学校や聖徳中学校にも参加を呼びかけた。また、高大連携校である天理大学の留学生に協力を依頼し、サポート役として参加してもらっている。中高大の生徒と学生が一堂に集った異文化学習プログラムは、今年の2回目も大変好評であった。



（3）高大連携による学校訪問プロジェクト、オープンキャンパスの実施

本校のスローガンである『夢の実現』をより可能にするためのプロジェクトとして、「大学を知る機会、学部・学科を知る機会」を令和4年度から新たに設けた。高大連携校である、奈良学園大学、天理大学、四天王寺大学にプロジェクトの協力を依頼し、進学希望の生徒を対象に実施し始めたところである。個人単位でのオープンキャンパスへの参加は、これまで同様推奨しているが、新たに学校単位で参加し、学習する機会を設置することにより、参加しやすい環境やより深く体験学習で

きる機会を目的として開始した。参加した生徒からは大変好評であり、生徒の思いを具現化できたように感じている。

2 成果及び課題

(1) の英語交流活動は、国際英語科2年次に開講する英会話Aの授業の一環として位置付けている。生徒は普段の授業以上の頑張りを見せ、笑顔で小学生に楽しく教えられるよう、事前準備をしっかりと行っている。普段とは違う一面を垣間見ることができる貴重な学習の場であり、教育的効果は絶大である。ただ、国際英語科2年生限定であることが課題であるが、これを皮切りとして、他の教科や専門外国語等にも拡大できればと考えている。また、令和4年度第2学期以降の実施に際しては、高大連携プロジェクトも交えて、四天王寺大学の学生との連携も模索し、小高大での協働学習も視野に入れて進めていく予定である。

(2) の国際交流サマーキャンプは、英語圏以外も含む様々な異文化を学習するプログラムである。オンラインではなく対面で実施するため、より充実した時間を過ごすことができ、貴重な体験となっている。また、中高大それぞれ学齢差を感じさせないつながりも実感することができる。(1) の取組と同様、教育的な効果は大きいと考えるが、国際科の生徒が参加の中心であることから、普通科の生徒参加数を増やしていくことが今後の課題となる。国際科以外にも参加の呼びかけをより一層促すことにより、国際高校の取組として、その活動内容を一層深めていきたいと考えている。

(3) のオープンキャンパスにおいては、直接大学に足を運び、大学の雰囲気や学びを知る機会を生徒に与えられる貴重なプログラムと言える。参加生徒のアンケート結果にも「進学に対する意欲が向上した」とあるように、一定の成果は得られたと思える。高大連携事業を強化しつつ、生徒の夢の実現の達成に向けて、引き続きこの取組を進めていくとともに、生徒のニーズにより合わせた新たな取組の検討も、行っていきたいと考えている。

地域連携・協働学習を行うためには、関係者全員の協力が必要不可欠である。地域と学校が協力しながらコミュニケーションをしっかりと図り、児童・生徒の学びや地域の課題を解決するための取組に、これからも関係機関と手を携え尽力していきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立高取国際高等学校Webページ <http://www.e-net.nara.jp/hs/takatorikokusai/>

特別支援学校 地域との連携・協働の部（⑥）

高等部「農場班」での実践

奈良県立奈良西養護学校 教諭 佐竹 寛之

1 実践内容

学校教育目標である「社会参加と自立を目指して主体的・意欲的に学ぶ力や生きる力を育み、人とのつながりの中で心豊かに共に生きることを喜ぶ人間の育成」を目指し、地域や大学、企業と連携した授業実践を行った。

（１）誰もが取り組みやすい農法

令和元年から実施。当時近畿大学で研究を進めていた「障害の有無や年齢、経験にかかわらず誰もが主体的に取り組みやすい農法」を授業に取り入れるにあたり、近畿大学農学部の教授を講師に招き、農業の技術や方法について研修を受けた。その後も継続的に指導を受け、その技術や知識を、障害特性を踏まえた指導・支援方法に活かし、教材準備や授業展開を行った。



（２）奈良県の伝統野菜を学ぶ

1年目には奈良県の伝統野菜である大和マナを、2年目には大和芋の栽培を行った。栽培前には教授とともに伝統野菜についての授業を行うことで、生徒は地域のことを深く学ぶことができた。また、地域のボランティアの方とも一緒に栽培することで、共に働く喜びを感じられることができた。大和芋は御所市と連携し、種芋の提供を受けて栽培した。御所市の担当者に来校いただき、教師が栽培法を教わったり、収穫時には授業を参観していただいたりした。これらの経験から生徒は地域社会とつながり、学校以外の人と協働する経験を積むことができた。



（３）地域とつながる取組

3年目には近畿大学の教授と学生1名が年間を通して授業に参加した。障害のある生徒と一緒に栽培を行うことで、学生にとっては障害理解を深める機会となった。学生の手も借りながら1年目に作った大和マナの低カリウム化（腎臓患者のための医療用野菜）を行った。教師と教授・学生との会議を重ね、生徒が自ら施肥管理できる方法を協議した。学生が教具作りを行い、授業の一部で施肥管理の説明を行った。本校生徒が視覚的に分かりやすい教具を使用す



ることで、生徒の理解が進み、付加価値のある「低カリウム大和マナ」を栽培することができた。学生はこれらの実践を報告書にまとめ、大学内で発表することで、大学の研究活動の成果としても活かすことができた。

今回の取組を通して、生徒達は地域の方やボランティアで参加していただいた方、教授や学生、行政や企業の方などさまざまな人と関わり、コミュニケーションをとりながら授業を積極的に受けることができた。本校に通う生徒の一生懸命授業に取り組む姿を見ていただき、農業分野でも十分に活躍できるということを知ってもらえたのではないかと考える。

2 成果及び課題

成果としては、生徒達は地域ボランティアの方、近畿大学、行政や企業の方などさまざまな人と関わり、コミュニケーションをとりながら共に働く喜びを感じ、授業に積極的に取り組む様子がみられた。そして、大和マナや大和芋など郷土の伝統野菜についても学ぶことができ、大和マナは収穫後、食育の一環として全校給食や、地域の方への対面販売の商品として使用した。大和芋は地域の企業が製造する芋焼酎の原材料として用いられ、地域社会とつながる経験ができた。また、作業工程を細分化し、作業内容を分かりやすく示すことで、作業者に様々な障害があっても取り組むことができるので、農福連携の一つの形を提示することができた。

課題としては、担当者が変わっても学校と大学や企業が継続的に協働できる仕組みづくりが必要と考えられ、学校全体で研修の機会を増やせるよう取り組みたい。また、今年度の活動として、地域の企業と一緒に菜の花の栽培から種の収穫、搾油、春日大社への奉納という年間の取組を実施している。年間を通した授業の展開を考えた上で、栽培したものが社会に役立つ流れをつくり、生徒が授業の中で達成感や充実感をもてるようにしていきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立奈良西養護学校 令和元年度研究紀要「高等部しごと『農場班』」

特別支援学校 地域との連携・協働の部 (⑥)

win-winの関係で学び合う地域支援『実践ヒント交流会』

奈良県立大淀養護学校 支援教育部

1 実践内容

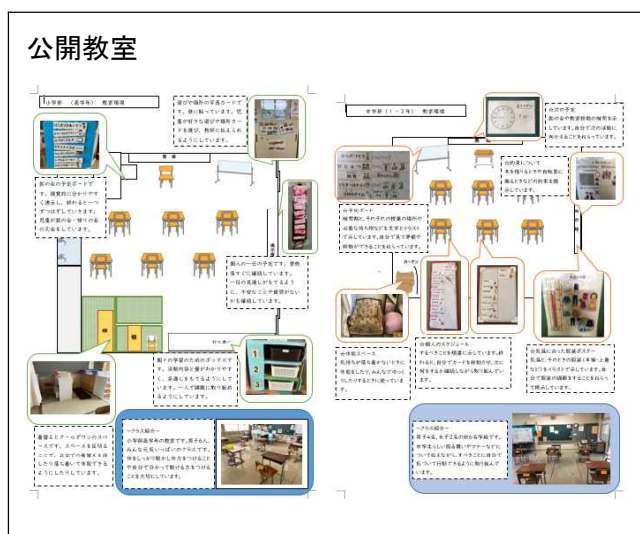
特別支援学校のセンター的機能の一つとして、地域の先生方への支援を行うために特別支援教育に関する相談『実践ヒント交流会』を実施している。校区内の幼稚園、保育園・所、こども園、小学校、中学校の先生と本校の教職員がwin-winの関係で学び合う教育相談交流会というテーマで、地域支援を担当している支援教育部が中心に計画し、全教職員体制で取り組んでいる。この取組は、2006年度に始まり、個別の相談会を中心に現在に至っている。毎年、夏季休業期間である7月下旬に3日間実施している。2021・2022年度は、感染症対策のためオンラインで実施した。

(1) 全体会

特別支援教育に関する情報提供や本校の取組を紹介している。

(2) 公開教室

教室環境や視覚支援の取組など、実際の教室を見ていただけるようにしている。また、小学部低学年、小学部高学年、中学部、高等部の4つの教育課程で系統だった取組について公開している。



(3) アイデア宝箱 (教材展示)


研究部が中心に企画し、本校教職員の自作教材だけでなく、身近な物を使った教材、支援のアイデアグッズなどを紹介している。

(4) 個別の相談会

事前の申込用紙に気になっていること、それに関わる具体的な様子を記入していただき、これらをもとに相談を行っている。例年、40件程度の相談が寄せられている。主な相談内容は、行動面や学習面が多く、幼児児童生徒の気になる行動の理由、指導支援内容について一緒に考えている。また、相談の際に本校の実践や公開教室、アイデア宝箱についても紹介している。

※オンライン開催については、情報教育部の協力を得ながら実施した。(1)全体会はできなかったが、(2)公開教室(3)アイデア宝箱はデータをPDF化し、(4)個別の相談会で画面共有機能を使って紹介しながら相談を進めた。

アイデア宝箱

提案名 (教科名)	ことば・かず(国語・算数)	No. 4
教材名	ゲーム(くらべてみよう)	作成者
	<p>《ねらい》</p> <ul style="list-style-type: none">・具体物を持ち比べて重い・中くらい・軽い分かる。・天秤を使って、重さを量る方法を知る。 <p>《説明》</p> <ul style="list-style-type: none">・3つの具体物を手で持ち比べて、重い・中くらい・軽い、の順番に並べた。身近にある物を使用し、楽しみながら取り組めるようにした。・手で持ち比べても重さが分かりにくい物は、天秤を使って、重い・軽い、をはっきりさせた。視覚的に重さが分かるので、待っている児童も一緒に考えることができる。	



4 成果及び課題

(1) 成果

毎年参加される先生、初めて特別支援教育に携わることになった先生など様々な先生方の参加がある。オンライン開催になったことで遠方の先生方の参加が増えた。また、こども園などの先生が複数で参加できるようになったのもオンライン開催の成果と思われる。どの先生方も、今の取組で良いのかと不安に感じたり悩んだりしながら一生懸命に実践されていることが伺える。参加後のアンケートには、

- ・対話方式なので話をしながら気になることを相談できた。
- ・何が良いのか悩んでいたが、活かせるようなヒントが聞けた。
- ・これで良いのかと悩んでいたが、話をする中で今の取組で良いとの話ができて安心した。
- ・子どもの実態に合わせた支援方法を一緒に考えることができた。
- ・個別の指導計画の作成に悩んでいたが課題の整理ができた。
- ・2学期からの方向性が少し定まった。

などの感想が多くあり、交流会が指導や支援の具体的なヒントになるとともに先生方の不安解消の一助となることができたと考える。また、明日からの教育保育に活力を感じたとの感想もあり、本校が果たすセンター的機能の重要性を感じている。また、オンラインのため聞き取りにくさが一部であったようだが、「顔を見ながらの交流会で安心して話をすることができた」「実際の教材や支援グッズを画面で見ることができた」との意見があり、オンラインでの交流会についても成果は得ることができた。

本校教職員にとっては、地域の特別支援教育のセンター的役割を担うセンター校としての専門性を高める機会となっている。地域の校舎などの幼児児童生徒の様子、学習や自立活動の取組、先生方の実践などを知ることができている。また、相談内容からニーズを読み取り、必要な情報を調べたり詳しい教員に聞いたりしながら相談に向けて準備をすることで本校の実践を整理でき、新たな気づきも生まれている。さらに、複数体制で行っていることで若手教員と経験がある教員が一緒に取り組むことができ、人材育成の機会にもなっている。本校教職員にとって実に学びの多い交流会になっている。

(2) 課題

オンライン開催となっている実践ヒント交流会であるが、移動時間が不要になったことなどから以前より気楽な気持ちで参加していただける半面、実際に教材や支援グッズを十分に見ていただけない課題がある。また、センター的機能の役割を担う本校への要望として、日々の実践の悩みについて話ができる機会や、子ども一人ひとりに応じた具体的な指導支援について相談できる本取組のような機会がもっとあれば良いという意見を多くいただいている。

3 最後に

共に学びあえる交流会をコンセプトに今後も『実践ヒント交流会』を進めていきたい。また、授業見学などで特別支援学校の教育活動を知っていただく機会として実施している『小中学校の先生のためのオープンスクール』や適宜実施している『教育相談』などのセンター的機能の取組をより活用していただけるように充実させていきたい。

高等学校 学習指導の部 (①)

表現探究による学習の基盤となる資質・能力を兼ね備えた創造性豊かな人材の育成

奈良県立香芝高等学校 教諭 川下 優一

1 実践内容

言葉による表現を基本とし、プレゼンテーションや創作活動、探究的な学習を通して、言語能力や情報活用能力、コミュニケーション能力を身に付けた創造性豊かな人材を育成することを目的に令和2年度に設置された「表現探究コース」で、カリキュラム開発と授業展開を行いました。コース独自科目として、「表現探究Ⅰ」(1単位)、「表現探究Ⅱ」「表現探究Ⅲ」(それぞれ2単位)を設定し、目的の達成のために以下のような実践をしました。

(1) 表現探究Ⅰ (第1学年開講)

毎日新聞社の「記者トレ」を全国的にも先駆けて教材として取り入れ、取材をして新聞記事を書く活動等を通して、取材相手を理解しようとする他者理解や、言語能力、情報活用能力の育成を目指しました。



「新聞」を通して、どの教科にも役立つ読解力や文章を書く力を身に付けます。記事を読みニュースを構造的に捉える力を培うとともに、見出しを付けて記事

にまとめることで、情報を発信、処理するための技能を習得します。また、取材をする際に必要な事前準備や、コミュニケーションの手法、メモの取り方などを学習して、実際に様々な方へインタビューを行います。取材先は、クラスメイトや教頭、中学校でお世話になった恩師、実際の新聞記者、市長など、多岐に渡ります。取材した内容は新聞記事としてまとめ、相互評価、教員による添削を経て取材先に届けました。

(2) 表現探究Ⅱ (第2学年開講)

創作活動やグループでの探究的な学習を中心に展開し、大衆に自らの考えや想いを伝える創造力や探究的な学びの基礎を身に付けることを目指しました。

地元のコミュニティFM「FMヤマト」に協力していただき、ラジオパーソナリティの方から、ラジオというメディアの特性や、どのように目の前にいない人々に自分の考えや想いを伝えるのかについて学習します。



その後は、2～3人のグループになって番組を企画し、相互に創作したラジオ番組を聴き合います。さらに、優秀なグループは、実際にラジオに出演し、授業で制作した番組を実際に公共の電波に乗せて発信することで、学んだ成果を実践しました。

また、SDGsに関連した探究的な学習を行いました。自ら調べて課題を見出し、解決しまとめて発表することを通して、様々なものごとの視点を広げるとともに、情報活用能力やプレゼンテーションのスキル向上を図ります。その中でも、SDGsに関連した内容を

英語でプレゼンテーションする活動では、難しい内容を分かりやすく、また容易な英語で表現することを学びました。

(3) 表現探究Ⅲ（第3学年開講）

自らの進路と社会や学術の課題が重なる部分を研究テーマとして、情報やフィールドワークで得た知見をもとに探究的な学習を行います。

表現探究Ⅱでの学びを生かして、それぞれの進路に関連した探究的な学習を個人で進めます。また、令和4年度はSDGsに関する知見をさらに深めるため、SDGs未来都市に選定されている三郷町にフィールドワークに行きました。学習した内容は報告書という形にして発表しました。

また、3年間で学んだ内容やその学びの中で得た能力などを整理し、報告書やプレゼンテーションのスライドとしてまとめます。これまでに培った言語能力や情報活用能力、プレゼンテーション能力を存分に発揮して、「表現探究」の学びの総括とし、下級生を対象にプレゼンテーションします。

2 成果及び課題

校外の様々な年代や職業の方と関わる中で、自分の考えを的確に伝える力が伸び、学校での授業における発表の技量も確実に向上しました。1期生を対象としたアンケート調査では、「ICTを活用して、問題を発見・解決するための方法を知っている」と肯定的に回答した生徒が入学時比で3.2倍、「問題の発見・解決に向けて、ICTを用いて適切かつ効果的に表現することができる」と肯定的に回答した生徒が同じく2.3倍と増加し、多くの生徒が情報活用能力の向上を実感しています。

また、表現探究の学びの様子はメディアの注目を集め、新聞やラジオ、テレビ番組、広報誌など、2年間で約50回取り上げていただきました。生徒の特色ある取組を多くの方に知っていただく機会となっており、学校の広報活動にも繋がっていると感じています。

表現探究コースは設立してまだ3年目であり、これからサステイナブルに取組を実践できるかが今後の課題です。そのためにも学校が一体となって、特色ある学校づくりを推進していく必要があると考えます。

3 その他参考となる事項

- ・奈良県立香芝高等学校 - 表現探究コースWebページ
<http://www.e-net.nara.jp/hs/kashiba/index.cfm/1,0,69.html>
- ・毎日新聞社 - 記者トレ
https://www.mainichi.co.jp/kishatore/case_study/05.html
- ・FMヤマト - 奈良県大和高田市のコミュニティFMラジオ局
<https://fmyamato.jp/>
- ・広報さんごう - 令和4年7月発行 三郷町広報誌
<https://www.town.sango.nara.jp/uploaded/attachment/5012.pdf>